
ダスト・シティ

大林秋斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダスト・シティ

【Nコード】

N20170

【作者名】

大林秋斗

【あらすじ】

ある日、明夫は自分の部屋にある物たちによって、ダスト・シティに招かれる。「俺がダスト・シティの建国の父？」ダスト・シティの住人の物たちに接待を受ける日々。
サイトからの転載作品です。

1

「明夫、明夫、起きなさい。いったい、この部屋は何？」

何だよ、うっとうしい。

休みの日の朝くらい、ゆっくり寝かしてくれよ。俺は疲れているんだ。

「・・・いったい何のようだよ。」

「やっと、起きたのね。」

いいこと、今日こそ、この部屋を掃除しなさい。

この四月で、六年でしょう、自分で片付けるのよ。」

また、かあちゃんのグチが始まった。

俺は、むずがゆい目をこすりながらくびをした。

かあちゃんには散らかっているように思われても、俺にとっては居心地いいし第一便利。

敷きっぱなしの布団のまわりに、マンガとお菓子の袋。

机の上には、教科書とノートが、ごちゃまぜに置いてある。

部屋全体、足の踏み場はないかもしれないけど、寝転がりながら欲しいものが取れる。

でもたまに、学校に必要なプリントをなくして、大騒ぎする時もあるけど。

「明夫、ちゃんと聞いてるの？」

かあちゃんが俺の顔を覗き込んだ。

「はい、はい。」

俺は適当に返事した。かあちゃんは、首をふりふり部屋を出た。

俺は大きく伸びをした。

「もう少し寝転んでいようと・・・」

手探りで、テレビのリモコンを掴んで、電源のボタンを押す。

ニュースが映った。

「〇〇市〇〇区で、また小学生が行方不明になっています・・・。」

俺はチャンネルをいろいろ変えてみた。

つまらない。あーあ、何かおもしろいことないかなあ。

「明夫君、明夫君・・・。」

どのくらい時間がたったんだろう。

俺の名前を誰かが呼んだ。

「何？」

俺は声のする方へ顔を向けた。

お菓子の袋やマンガが散らばっているだけで、誰もいない。

「私です、明夫君。」

俺の布団と畳の隙間から、黄ばんだ新聞紙が起き上がった。

新聞紙に続いて、ポテトのお菓子の袋やマンガなど、部屋中の物が一斉に起き上がった。

「うわあ!!」

俺は思わず大声を出した。

「これは失礼、驚かせてしまったね。」

新聞紙には、手と足があった。俺の側に近寄ると、腕組みをしながら、ひょいと座った。

俺は慌てて立ち上がった。その拍子に作りかけのプラモデルを踏んでしまった。

「痛い、気をつけたまえ!」

プラモが叫ぶ。

「さあ、君をわれわれの町へご招待いたします。」

新聞紙が恭しく言う。俺は訳が分からないまま、意識が遠のくのを感じていた

2

目が覚めると、俺は真っ白な部屋のベッドにいた。

「やあ、気がついたかね。」

新聞紙が微笑みながら言った。

「ここはどこ？なんで新聞紙がしゃべってるんだ？」

俺はベッドから起き上がると、首をぶるんと横に振った。

頭の中が、がんがんする。夢を見ているのだろうか。

俺の思いに関係なく、新聞紙は話している。

「明夫くん、驚かせてすまないね。」

どうか楽にしてください。

君には感謝しているのだよ、

ようこそ、ダスト・シテイへ。」

新聞紙はパチンと指を鳴らした。

マンガの本が四人、いや四冊が、仲良く並んで入って来た。

各々、ご飯や焼肉や果物を盛り付けたお盆を持っている。

俺の寝ていたベッドの横にテーブルが置かれて、お盆の上のごちそうが並べられた。

「さあ、召し上がれ。君は我々の大切なゲストだ。」

新聞紙が再び指を鳴らすと、今度はスーパーの袋がやってきた。

そして、俺の前で、ひらひらダンスを始めた。

俺はあっけにとられてた。目の前のごちそうを食べる気も起きない。

「いかがいたしました？お気に召さないことでも？」

新聞紙が尋ねた。

「なんで、歓迎するの？」

「それはね……。」

新聞紙は、ゴホンとひとつ咳ばらいしてから言った。

「このダスト・シティは、明夫君、君の協力によって建国されたのだよ。」

「俺、そんな覚えはないけど。」

「いいや、君はおおいに協力してくれた。」

建国はきみのおかげです。」

新聞紙が恭しく頭をさげた。

そして、大きく息を吸い込むと、ゆつくりと話し出した。

「明夫君、君の部屋は、いつもわれわれの仲間がいっぱいだった。

我々は、仲間同士の交流、話し合いの場を、君の部屋でおおいにした。

そして、ダスト・シティを建国することを計画し実行したのだ。

君の部屋がなければ、成功しなかったと思う。

すべて君のおかげなのです。

我々は、ダスト・シティ建国の父に感謝の意を表したく、君をお招きしたのです。」

新聞紙がまたぺこりと頭を下げた。

俺もつられて頭をさげた。

すごく変な気分。

俺のおかげって言うけど、オーバーじゃない？

でも、せつかくのごちそう、すこし食べてみるか。

新聞紙は、今度はにんまり笑ってる。

変な奴。

「明夫君、ゆっくりしてってください。

この町のすばらしさを、建国の父に見ていただきたいのです。」

3

俺は外に出た。

俺のいた部屋は白い小さなドームの中にあった。

それと同じようなドームが、点々と並んでいる。

奥の方には森が見える。

俺はドームの間にある道を歩いた。とても静かだ。

「明夫君、いい所でしょう」

振り返ると、ポテトの袋がいた。

「やあ、明夫君、なに不思議そうな顔をしているのです？

ぼくですよ、ぼく。」

「・・・あつ、俺の部屋のポテト。」

ポテトの袋はうなずいた。

「ここは、まさに理想郷、ユートピアですよ。」

僕たちの生活に必要なものは、すべて自給自足で賄われ、むだなものは何もないんだから。」

ポテトの袋は、一番大きなドームを指さした。

「あれは、シティの機能を支えている発電所です。」

ポテトの袋は、言葉をかみ締めるように言った。

「僕たちは年をとるともろくなる。」

そうした物たちが、あの発電所に集まって、最期の仕事をするんです。

自分の体を捧げて、シティのエネルギーになるのです。」

「それって、死ぬってこと？」

「人間の言葉では、そうなるかも。」

でも違います。

最期まで、物として役に立つのですから、名誉なことなのですよ。」

ポテトの袋は、胸を張って言った。ほんとうに最期の仕事、怖くないんだろうか。

俺たちは、森に向かって歩いた。

ポテトの話によると、森の前にある広場で何かあるみたい。

ポテトの袋は、口笛を吹きながら歩いている。

「ほら、見えてきましたよ。」

広場と行ってもそんなに大きくない。

中央に小さな噴水があり、まわりを派手な色したお祭りの露店が並んでいる。

露店の定員も客も、マンガや、ごみ袋、ミニカーとかの物たち。がやがやと、にぎやかだ。

「皆さん、お待ちどうさま、

ダスト・シティ建国の父であり、特別ゲストの明夫君です！」

ポテトの袋が大声で言った。

拍手とともに、歓声が挙がる。

「さあ、この露店はすべて、明夫君のために用意しました。

存分に楽しんでください。もちろんお金はいりません。」

ポテトの袋は、どうぞと俺をうながす。

俺は頭を掻いた。

あまりにもすごい歓迎ぶりだ。

的あて、スーパーボール、わなげ、たこ焼や、焼き鳥や、どの店で遊べばいいのか目移りしてしまう。

ポテトの袋は戸惑う俺に笑いかけながら、手を引いて、近いところにあった店にはいった。

そこはミルクせんべいや。

店主は、へこんだサッカーボール。

代の上でさびた小さなコインがダンスしている。

「いらしゃい。」と言うと、

水槽の中に大ジャンプして飛び込み、

シンクロナイトスイミングしながら、そこに置かれた欠けたガラスコップに入った。

「大当たり!!」

サッカーボールは十五枚のミルクせんべいを作ってぼくに渡した。

どの店もこの調子。くじにはずれはない。

物たちは陽気で親切。

俺は、調子に乗って遊んでたけど、だんだんくたびれてきた。

歓迎ばかり、当たり前ばかりは、いいけれど、なんかむずがゆい。

ポテトの袋が俺の疲れを察したのか、俺が元、休んでいたドームへと連れていった。

「休んでください。」

歓迎会はずっとありますから、慌てて遊ばなくとも大丈夫です。」

おれはドームの中にあるベッドに横になると、すぐにまぶたが重くなった。

目をつむると、すぐに眠ってしまった。

どのくらい時間がたったのだろう。

どこからか話し声がする。

「・・・あの人間はどう始末するの。」

「決まっているじゃないですか。他の人間のように・・・。」

「そうね・・・。」

声をひそめた笑い声がする。俺の額に油汗がにじみ出した。

「明夫君、目が覚めましたか。」

「どうしました？ 顔色が悪いですよ。」

俺が薄く目を開くと、ポテトの袋とマンガ雑誌がいた。

さっき話してたのはこいつらだ。二人は俺の顔をまじまじと見ている。

俺は重たい口をなんとか開いて言った。

「・・・ちょっと、疲れたみたい。」

「それは、いけませんね。疲れのとれるいい薬を持ってきましたよ。」

「いいよ、いいってば。いらない！」

俺の返事を無視して、ポテトの袋はマンガ雑誌に、薬を取りに行かせた。

「いらないって、言ってるのに！」

俺は、ベッドから飛び起きた。

ポテトの袋は「よく効く薬ですよ。」と言いながら、近づいてくる。

俺はポテトの袋を突き飛ばした。

ポテトの袋はくしゃりと、床に転がった。

俺は、ポテトの袋を見ることなく、シテイの出口めざして走った。

しかし、どこに出口があるのだろう。

白いドームに、森、広場の露店。

それ以外は何も知らない。

ポテトたちの目的（俺になぜ、悪意を持っているのか）も知らない。

手がかりが少なすぎる。

俺の目の前に、灰色の汚れたドームが見えてきた。

『産業廃棄物処理場、立ち入り禁止』と書かれた看板がある。

ちょうどいいかも、ひとまずあそこに隠れて、考えよう。

でも、ダスト・シテイの産業廃棄物って？

俺は辺りを見回してから、そのドームへと向かった。

ドームはひっそりしている。

右の方にドアがある。

俺は緊張しながら、慎重にまわしてみた。

鍵、かかってない。

すんなりと開く。

中を見て驚いた。

ドアの向こう側は鉄格子。

その奥に、十数人の小学生。

俺はドアを閉めると、牢屋に近寄った。

「なんで、みんな牢屋に入っているんだ？」

中にいる一人、黄色の服を着た男の子が、ひそひそ声で言った。

「僕たち、あいつらゴミにゲストとだだまされて招待され、ここ

に閉じ込められたんだ。」

「お前、なんていう名前？」

「僕は裕太。」

「俺は明夫。しかしなんでこんなことを・・・。」

俺は鉄格子を開けようと、引っ張ったり押したりした。

しかし、びくともしない。

「無理だよ、僕たちもやってみただけぞ。」

それより、聞いて、大変なんだ！」

裕太が言った。

「あいつら、僕たち、人間の住んでいる町に死の灰を降らせて、

自分たちの町、ゴミの町にしようとしているんだ。」

「しのはい？」

「放射能の燃えカスのことだよ。」

あんなのが降ったら、みんな死んじゃう。

この看板見たろう？人間はあいつらにとっての産業廃棄物、ゴミなんだ。」

牢にいる他の子たちが泣き出した。

「でも、何をすればいいんだ？」

俺は固く唇をかんだ。

「この町、いつそなかったものになれば・・・。」

「それ、できるかもしれないよ。」

裕太は、何かを思いついたようだ。茶色の瞳がきらりと光った。

5

「発電所だよ。」

発電所を壊せば、この町もやつらの企みも、潰せるかもしれない。

明夫君、頼む。

自由に動けるのは君だけだよ。

どうか、発電所を壊してくれ。」

「わかった。やってみるよ。」

俺は注意しながら、灰色のドームを出た。

あいつらは、いないよう。

発電所を壊せといっても、どうしようか。

そう、考えながら歩いていると、俺の後ろで、カサコソ音がする。

悪い予感だ。俺はおそろおそろ振り返った。

ポテトだ。ポテトの袋が立っている。

「捜しましたよ。」

ポテトの袋が近づいてくる。

「明夫君、だめですよ、あの後ろにあるドームに、行ったのですね。
立ち入り禁止なのに。」

ゲストさまでも、シティの決まりは守っていただかないと・・・。」

俺は、話の途中で逃げ出した。

「お待ちなさい!!」

ポテトの袋が追いかけてくる。

ウーとサイレンが鳴った。

『アキオヲタダチニ、レンコウセヨ。』

緊急の放送が繰り返し、何度も流される。

捕まってたまるものか。俺は必死になって、発電所を目指した。

足がくたびれて重い。

それでもなんとか発電所につけた。

でも、入り口に何かいる。

古ダンス、大きな斜めの傷が目立つダンスが立っている。

入口のガードをがっちり固めている。

俺は深く息を飲むと、気合を入れた。

ダンスめがけて走った。

ダンスはにやにや笑っている。

がっちり俺を捕らえようと構えている。

俺の体格から、ダンスは自分が優位に立っていると思っているようだ。

俺はダンスに当たりそうになった瞬間、身をひるがえして後ろにまわった。

タンスがよろめいた。

思った通り。大きくて重い体は、すばやい動きができないんだ。

俺はすかさずタンスの背中を思いっきり押した。

タンスは体を支えきれず前のめりに倒れた。

俺は、急いで発電所の中へ入った。

発電所の中は機械だらけ。

熱気でむっとしている。

これを壊せといってもなあ。

「そのまま動くな、明夫くん。」

ポテトの袋が走ってくる。

俺は逃げた。

ポテトの袋以外の追っ手もどんどん発電所の中に入ってくる。

俺は不意に腕を捕まれた。

捕んだのは見覚えのあるジェット機のプラモ。

「放せ。」と俺は腕を振った。

ジェット機の腕は、がちりとしたまま離れない。

俺はあせりながらとっさにひらめいた。

右足を上げてジェット機の左の尾翼にけりを入れた。

パキンと乾いた音がすると、ジェット機の翼がもげた。

ジェット機は手の力を緩めた。

俺はすかさず、今度は右の翼にけりを入れる。

ジェット機がうめく。

体のバランスを失い床に転がった。

やっぱりだ。

俺の作ったジェットだ。

左の尾翼と、右の翼がぴったりとはめこめなくて、いいかげんに取り付けたジェット機。

俺はジェット機のもげた翼を拾い上げた。

機械はわからないけど、やるのみ！！

俺は、やたらめっぽう発電所の機会に向かって、翼を振り下ろした。

「やめろ！！」

ポテトの袋が叫ぶ。そんなのかまってられない。

俺は休まず機械を思い切り叩いた。

機械はプスプス音を発てた。

臭い匂いと共に煙が上がる。

警報ブザーがけたたましい音で鳴った。

「炉が壊れる！」

ポテトの袋たちは慌てている。

煙は勢いを増し、炎が上がる。ここからでないと危険。

「あなたを許しません。」

ポテトの袋が顔を歪めて俺に詰め寄る。

出口はどこだ。それより、この物たちから俺は逃げ出せるのか？

発電所の中のあちこちに火の手が上がる。

額からも首からも汗が浮き出す。

煙が発電所の中を覆いつくそうとしている。

ポテトの顔がくしゃりと歪んだ瞬間、燃え出した。

それでも俺に近寄ろうとする。

俺は口を押さえポテトの袋を無視して走った。

燃え出しているのはポテトの袋だけではない。

熱に弱いやつから順に火をふいたり溶け出している。

やつら、だけじゃない。

俺の髪の毛も、じりじり、妙な感じだ。

どうにか、外に出れた。

のどがからからになっている。

火は他のドームにもあがっている。

物たちが何かを叫びながら、逃げ回っている。

裕太たちは大丈夫だろうか。

俺は裕太たちのいる灰色のドームへ急いだ。

灰色のドームにも煙があがっている。

（裕太。）

俺は煙を突っ切って、ドームの中へ入った。

ドーム中も煙で見えにくい。

口を押さえ煙をなるたけ吸わないようにしながら、牢屋のある方向へと足を向けた。

「みんな無事か!!」

「だいじょうぶだ。」

すぐに裕太の返事が返ってきた。

俺は声のする方に進んだ。

煙の向こう、ぼんやりと鉄格子近くに固まる裕太たちの姿が見えた。
ほっとするのもつかの間。

耳が破れそうなくらいの大きな爆音がドーム内に響く。

俺はあわてた。

爆音は裕太たちのいる牢屋からだ。

白煙が一気に辺りを覆う。

「裕太!!」

ごほごほと咳き込む声がした。

「・・・心配ない。」

裕太の声だ。俺は少しほっとした。

裕太は言葉を続けている。

「この町が壊れかかっているみたい。

今ので壁が崩れた。そこから外に出る。明夫もここから逃げろ!」

「了解、絶対、家に帰ろうな！」

「おう、あったりまえじゃん！！」

このドームにも火が移ってきた。

鉄格子の向こうが静かになった。

外に向かったのだろう。

俺もぐずぐずしてられない。逃げなきゃ。

「明夫くん、ダストシティは、終わりですね。」

出口に向かおうとした瞬間、声がした。

もうもうと立ち込める煙の向こうから、声の主はゆっくり姿を現した。

新聞紙。俺をこの町に招いた新聞紙だ。

新聞紙がスローモーションのかかったビデオみたいに、ゆっくり近づいてくる。

俺は金縛りにあったみたいにしてその場から動けない。

足がかくかく小刻みに震える。

「わたしは、君を責めようというのではありません。」

新聞紙は言った。

「わたしたちは、君たち人間に復讐しようとしたのは事実だ。

人間はわたしたちを作っては、飽きるとすぐに忘れたり、捨てたりしてしまう。

わたしたちは、その度に傷ついた。

わたしたちの、この思い、君に理解できるかい？」

新聞紙が焦げ始めた。

「しかし、人間がいなければ、わたしたちは生まれなかった。

わたしたちはほんとうは、君たち人間を愛しているんだ。

わたしたちの気持ちを忘れないで……。」

新聞紙がみるみるうちに燃え上がった。

俺の体も熱い。

ほほも体もかっかとしている。

ドグォーンと低い爆発音が続けて起こる。

天井からばらばらと壁が屑になって降ってくる。

気がつくと俺は自分の部屋にいた。

しかし、初めは、ここが自分の部屋だとわからなかった。

俺の部屋にあった物というものが、全くなかったからだ。

「明夫、明夫ちゃん、帰ってきたのね。」

かあちゃんが、俺の部屋に入ってくるなり、目から涙をこぼして抱きついてきた。

俺はこっちの世界（人間の世界）で、一ヶ月の間、行方不明になっていた。

同時に行方不明になってた他の子ども（裕太たち）も、家に戻った。

新聞やテレビは

『現代の神隠し、謎の解決』

なんて、言ってる。

俺たちは誰もダスト・シティのことは話さない。

話しても誰も信じそうにないし、変人扱いされそうだし。

俺が家に戻ってきた時は、気持ち悪いくらい優しかったかあちゃん
は、

最近、教育ママゴンに変身している。

家庭教師を頼み、そいつが来る日には、強制的に掃除させられる。

俺は勉強嫌い。

今に見てろよ。

俺の部屋の物は、すっかり新しくなった。

俺は道端に粗大ゴミなんか捨てられていると、つい足を止めてしま
う。

ゴミたちが集まって、ダスト・シティ再建の相談をしているように
思うからだ。

それにしても、暑くなった。もうすぐ夏休み。

とても楽しみ。裕太と遊ぶ計画があるもの。

もちろん、かあちゃんには内緒のこと・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2017o/>

ダスト・シティ

2011年10月7日12時54分発行